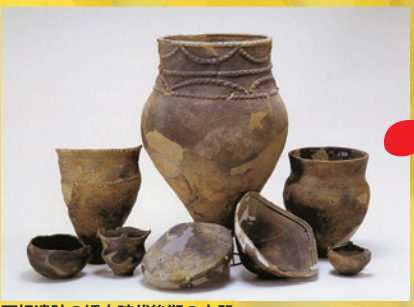
出土遺物公開事業

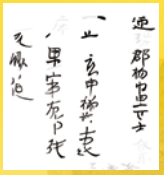
千葉ニュータウンの昔むかし

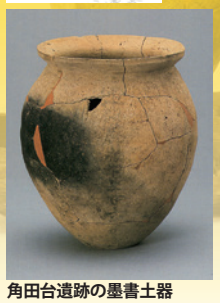
角田台遺跡の
第Ⅲ層出土石器


西根遺跡の縄文時代後期の土器

船尾白幡遺跡の弥生時代後期の土器

復山谷遺跡の古墳時代前期の土器




角田台遺跡の墨書土器

印西牧絵図（印西市教育委員会提供）

千葉県立房総のむら

印旛郡栄町龍角寺1028
☎0476-95-3333

平成26年 7月19日(土)～9月21日(日)

観覧料：300円

印西市文化ホール

印西市大森2535
☎0476-42-8811

11月6日(木)～11月27日(木)

観覧無料

千葉県立北総花の丘公園

印西市原山1-12-1
☎0476-47-4030

11月12日(水)～11月30日(日) ※パネル展示

観覧無料

講演会

平成26年9月6日(土)
午後1時30分～4時
白井市文化会館中ホール
白井市復1148-8　☎047-492-1121
当日受付、先着順、無料
※詳細は主催者までお問い合わせください。

講　座

平成26年7月20日(日)
午後1時30分～3時
千葉県立房総のむら

平成26年11月15日(土)
午後1時30分～3時30分
千葉県立北総花の丘公園

講師はいずれも財団職員
※詳細は各会場にお問い合わせください。

【主　催】（公財）千葉県教育振興財団　　【後　援】千葉県教育委員会／印西市教育委員会／白井市教育委員会
【問合せ】（公財）千葉県教育振興財団調査研究部　☎043-424-4850　http://www.echiba.org/bunkazai_top.html

ごあいさつ

千葉県では、年間450件ほどの発掘調査が行われ、房総各地の歴史と文化を伝える貴重な成果が数多く得られています。当財団の調査成果については、展示会をはじめ、ホームページや広報紙『房総の文化財』などの刊行物等で順次ご紹介してまいりました。

今回企画した展示会は、印西市・白井市・船橋市にまたがる千葉ニュータウン地区における区画整理事業に伴う発掘調査の成果です。多くの遺跡については、すでに整理作業を経て発掘調査報告書として公刊しており、その中から「千葉ニュータウンの昔むかし－千葉北部地区の発掘ものがたり－」と題して、これまでの成果をご紹介いたします。

北総地域の歴史を築いてきた旧石器時代から近世の多様な文化の様相を感じていただき、埋蔵文化財保護へのご理解をお願い申し上げる次第です。

最後になりましたが、ご協力をいただきました関係機関並びに関係者の皆様に、心からお礼申し上げます。

公益財団法人　千葉県教育振興財団

凡例
1 本図録は、平成26年度出土遺物公開事業千葉ニュータウン展の展示解説図録です。
2 展示資料はすべて千葉県教育委員会所蔵です。
3 本展示は、調査研究部長 伊藤 智樹・整理課長 今泉 潔の指導のもと、主任上席文化財主事 栗田 則久・井上哲朗が担当し、図録の執筆及び編集も栗田・井上が行いました。

千葉ニュータウン

千葉ニュータウン(千葉北部地区)は、現在の都市再生機構(UR)による印西市･白井市･船橋市にまたがる約3,000ヘクタールの広大な面積を対象として計画されました。この事業に関連する発掘調査は、当財団の前身組織である千葉県都市公社が昭和45年8月から調査を開始し、その後、(財)千葉県文化財センターから現在の組織に受け継がれ、平成25年度にほぼ終了しました。

その成果は、発掘調査報告書としてまとめ、現在までに29冊の報告書が刊行されています。約3万年前の旧石器時代から印西牧に代表される江戸時代まで多くの成果があがっています。

千葉ニュータウン内の展示遺跡

Ⅰ 文化のあけぼの　旧石器時代

第四期更新世(約260万年～１万２千年前)において、狩猟や採集の存在が確認された時代を旧石器時代と呼んでいます。房総では、最終氷期後半期に相当する約３万５千年前～１万２千年前までの旧石器時代の遺跡が確認されています。この時期は、全般的に寒冷で、気候変動も激しいものでした。そのため、海水面の大幅な低下による海岸線の後退が想定されています。

千葉ニュータウン地区内では、旧石器時代の遺跡が数多く調査され、立川ローム層のⅨ層～Ⅲ層までの各時期の石器が発見されています。石器作りには、素材としての石材の確保が必要ですが、房総では、限られた地域でしか産出せず、多くは北関東や信州・伊豆など遠く離れた地域から石材を入手していたことが明らかとなっています。千葉ニュータウン地区内の旧石器時代の遺跡から発見された多くの石器も、これら遠隔地から運ばれてきた石材が使われていました。当時の広範囲な移動のようすを石材からうかがうことができます。

環状ブロック全景

環状ブロック出土の主な石器

泉北側第３遺跡（いずみきたがわ）

本遺跡からは、５枚の文化層から1,798点の石器が発見されました。その中で注目される存在が、第１文化層(Ⅸ層中部～上部)に広がっている大型の環状ブロックです。その大きさは南北68ｍ、東西46ｍと、県内でも最大級の規模を誇っています。

このブロックの石器点数は1,393点で、本遺跡全点数の77%を占めています。最も多くみられる石器は台形様石器で、石材はチャートとガラス質安山岩がほとんどです。

この環状ブロックの大きな特徴は、ブロック内の石器集中か所別に各地からもたらされた石材がまとまっていることです。

角田台遺跡（つのだだい）

第Ⅸ層～第Ⅲ層にかけての23地点の石器集中地点が確認され、最も古い時期では、Ⅸ層～Ⅶ層にかけての環状ブロックが２地点で発見されています。第11地点の環状ブロックの石器と500ｍほど離れた位置にある第１地点との間で石器が接合しました。これにより、両方の石器群が同時に存在していたことがわかり、人々がお互いに行き来していたことが推測されます。

また、Ⅲ層からも豊富な石器群とともにが調理に使われたと思われる多量の焼けた礫群を伴っており、小規模ながらもムラが営まれていた可能性があります。

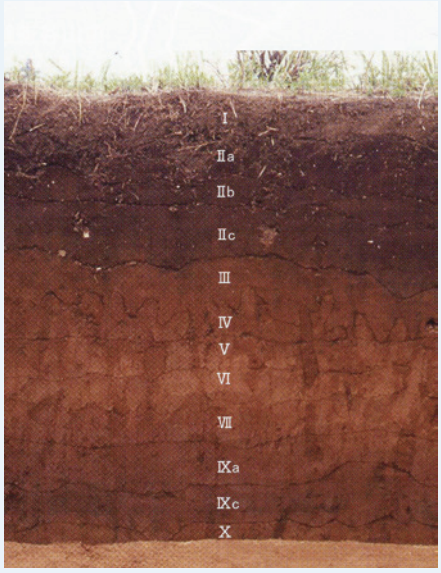
第Ⅸ～Ⅶ層(第11地点)出土の石器

第Ⅲ層(第１地点)出土の石器

復山谷遺跡

第Ⅸ層上部～第Ⅲ層にかけて４枚の文化層が確認されました。第２文化層となる第Ⅶ層～第Ⅵ層には、北関東起源の石材が石刃の形態でもたらされているブロックが認められます。第４文化層は、第Ⅲ層に生活面があり、玉髄（メノウ）や珪質頁岩、碧玉などの石材から小型の石器が作られた工程が確認できます。

また、黒曜石の産地については、分析・同定の結果、栃木県高原山、長野県和田峠・八ヶ岳、神奈川県箱根、東京都神津島と複数の地域から運ばれてきたことが明らかとなっています。



旧石器時代から現代までの土層の堆積状況

第Ⅵ層上部～第Ⅶ層下部の石器

Ⅱ ムラの始まりと終わりのころ　縄文時代

千葉ニュータウン地区では、今から約8,500年前頃の縄文時代早期から約3,000年前の縄文時代後期までの土器が見つかっていますが、それほど大きなムラは営まれていなかったようです。縄文時代早期の遺構として、屋外で火を焚く施設として使用されたこの時期特有の炉穴が多く調査されています。白井市一本桜南遺跡では、縄文時代前期（約6,000年～5,000年前）の石器製作跡が見つかりました。狩猟具としての石鏃を大量に作っていたのでしょう。

低湿地に所在する縄文時代後期の印西市西根遺跡では、７か所の土器集中地点から３トン以上にのぼる多量の加曽利Ｂ式土器（約4,000年前）が出土しました。日常的に使用された土器を置いていた場所と考えられており、周辺の台地上にこの時期の大きな集落が存在していると思われます。

炉穴の縄文土器出土状況（083号炉穴）

083号炉穴の縄文時代早期の土器
土器の表面に貝殻の背で模様を付けたのがこの時期の特徴で、条痕文系土器と呼ばれています。

複数の燃焼部をもつ炉穴（081号炉穴）

印西市泉北側第２遺跡の炉穴

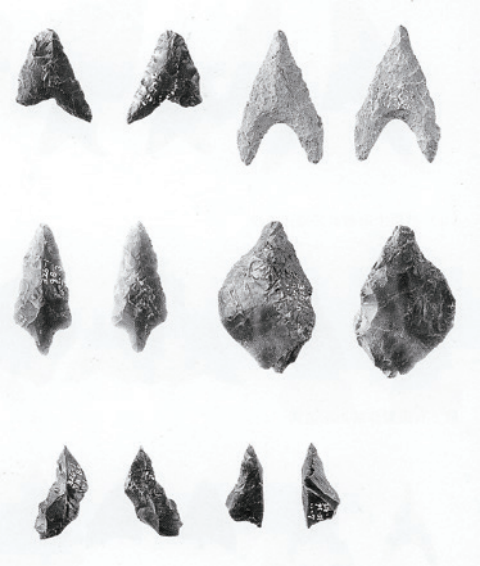
縄文時代の炉は、竪穴住居内の屋内炉と住居外の屋外炉に大きく分けられます。屋外炉となる炉穴は、縄文時代早期後半（約7,000年前）に特徴的にみられる火を焚いた施設で、ムラが共同で利用した炉とも考えられています。

炉穴は、基本的に楕円形を示し、土器を用いて調理などをした燃焼部が先端に位置しています。掘り込みを再利用して、燃焼部がタコ足状にいくつも形成されているタイプの炉穴も多く見つかっています。

白井市一本桜南遺跡の石鏃製作跡

台地の縁辺部に11か所分布しています。チャート製の石鏃や未製品、剥片などが出土しており、黒曜石はほとんど使われていません。土器などが伴っておらず、正確な時期は分かりませんが、石鏃の形などから縄文時代前期に属するものとされています。

石鏃製作跡の分布状況



第１石鏃製作跡の石鏃と未製品

印西市西根遺跡

縄文時代として、１条の自然流路と７か所の後期加曽利Ｂ式土器を中心とした土器集中地点が見つかっています。土器の集中地点は流路に沿って存在し、ほぼ当時の状況を保って分布しているようです。

各地点の土器群は、時期的にまとまって出土しており、ある程度土器の原形を保持した状態で置かれていた可能性が高いとされています。また、各地点とも土器のほとんどが火を受けており、日常的に使用されていた土器が置かれていたことも指摘されています。

土器以外の石器や低地遺跡に特徴的な木製品はほとんどありませんが、唯一、流路内から単独で出土した漆塗りの飾り弓はあまり例のない貴重な資料となっています。アジサイ属の丸木を削り、樺（かば）巻きを加え、ベンガラ漆を塗った丁寧な作りのものです。

西根遺跡で調査された流路

縄文土器が一面に見つかったようす

縄文時代後期の土器

（拡大）

縄文時代後期の漆を塗った木製飾り弓

Ⅲ　２千年前のムラ　　弥生時代

弥生時代の遺跡はあまり多くありませんが、大規模なムラが形成される次期の古墳時代前期に継続するような形で弥生時代後期の集落が小規模ながら点在しています。

SI076 竪穴住居跡

船尾白幡遺跡（ふなおしらはた）

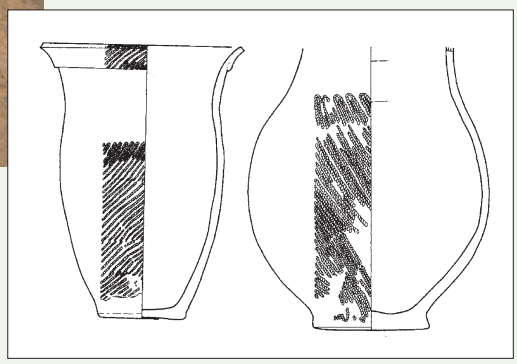
後期の竪穴住居が16軒調査され、比較的まとまった集落が営まれていたようです。調査範囲がそれほど広くないことを考えると、台地全体ではさらに多くの竪穴住居が存在していることが想定され、この時期の拠点的なムラとなる可能性があります。

後期はじめ頃の土器（SI076）
この竪穴住居からは、比較的遺存状態の良好な大型の壺が見つかっています。口縁部から頸部にかけて櫛描きの沈線文で区画をし、内部を格子目の沈線で埋めるものがあり、このような模様はこの地域の弥生時代後期はじめ頃の特徴で、印旛沼西岸地域における好資料となっています。

鳴神山遺跡（なるかみやま）

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居が21軒調査され、特に、弥生時代から古墳時代へと移行する段階の特徴を示しています。弥生時代の土器は、下総から茨城県に広く分布する、撚糸文を多用する北関東系土器が主体となります。

021 竪穴住居跡
この竪穴住居には炉が確認されたのみで、柱の穴は掘り込まれていませんでした。左上隅から下の図の弥生土器がまとまって出土しました。



北関東系の弥生土器（021）
北関東系の弥生土器は、土器の表面の大部分に撚糸（よりいと）文を施すのが特徴です。

Ⅳ-1 弥生時代から古墳時代へ　古墳時代

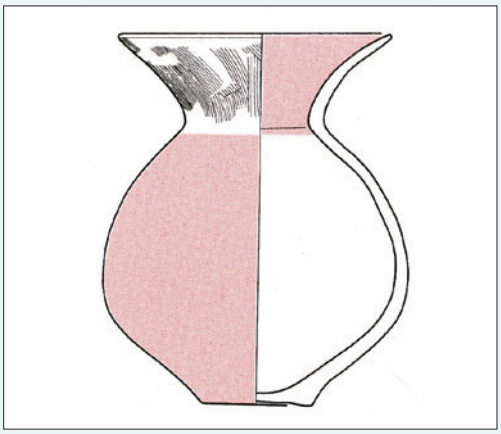
弥生時代後期からのムラを継承するような小規模な集落が形成されていますが、大きな特徴としては、在地の土器の中に他地域の系統をもつ土器が含まれ、古墳時代前期になって新たに開発された大きな集落が出現する点にあります。房総では、東京湾東岸地域など、当時の先進地域に東海や北陸・畿内などに出自が求められる土器を中心とした文物がもたらされています。泉北側第２遺跡や船尾町田（ふなおまちだ）遺跡などにその傾向がみられ、この地域に人々の移動とともに先進文化が流入してきたことを示しています。

一本桜南遺跡

古墳時代前期の竪穴住居60軒で構成された比較的大規模な集落となっています。この遺跡では弥生時代の遺構がなく、この時期になって突如として集落が出現しています。また、古墳時代前期以降の竪穴住居がまったく認められないことから、この遺跡の集落は、きわめて短い期間のみに営まれたものと考えられます。

041号竪穴住居跡

土器の出土状況

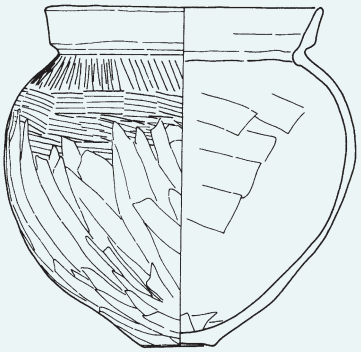


041竪穴住居からは、内部に砂鉄が入った壺が出土しました。この砂鉄を分析した結果、かなり高品質の砂鉄であることが明らかとなり、県外から持ち込まれた可能性のあることが指摘されています。

しかしながら、一本桜南遺跡では、製鉄をうかがわせるような遺構や遺物は確認されていません。ただ、八千代市沖塚遺跡では古墳時代はじめ頃の鋼精錬遺構が存在し、多量の砂鉄も見つかっています。この例からは本遺跡周辺での製鉄遺構の存在も考えられます。壺が赤く塗られていることは、砂鉄を入れた製鉄に関わるマツリが行われていたのかもしれません。

泉北側第２遺跡

一本桜南遺跡と類似した様相の遺跡で、ほぼ同じ時期の竪穴住居70軒が調査されています。この遺跡の土器群の中で注目されるのが北陸系土器の存在です。５軒の竪穴住居から出土し、壺や甕などいくつかの器種にみられています。いずれも県内の他の北陸系土器より粗雑な作りであり、土器の形だけを模倣して在地で焼かれたものと思われます。



北陸系の甕

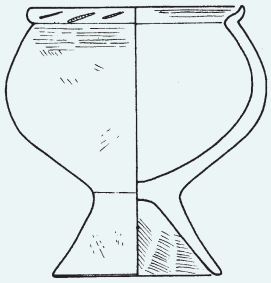
竪穴住居出土の銅鏃
銅で鋳造された鏃で、当時の貴重品です。集落内に有力者がいたことがうかがわれます。

船尾町田遺跡

調査によって、21軒の竪穴住居が見つかり、20軒が古墳時代前期に属しています。一本桜南遺跡と同様にきわめて短期間に営まれた集落といえます。

この遺跡の特徴は、北陸系土器とともに東海系の土器が含まれている点です。西の文化の影響はこの遺跡にもみられます。

船尾町田遺跡全景



東海系の台付甕
東海系の土器は、「受け口状甕」と呼ばれる台付き甕で、口縁部外面に櫛歯による列点文を施す特徴があります。

Ⅳ-2 方墳と前方後円墳　古墳時代

復山谷遺跡

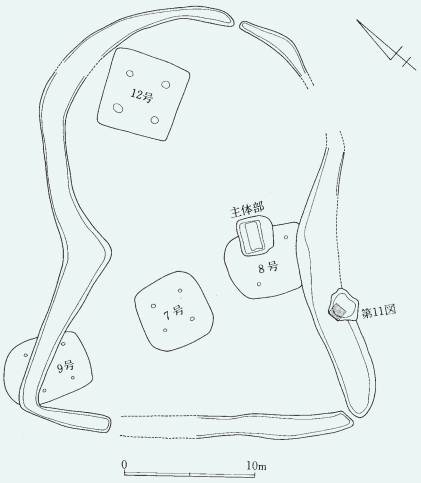
弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居41軒が調査されており、この集落域からやや離れた位置に、古墳時代前期の5基の方墳が狭い範囲に集中して分布していました。重複して築かれている部分もあることから、ある程度の期間、この区域が集落の墓域として意識されていたことが考えられます。

方墳群（奥）と竪穴住居（手前）

003方墳の土器
これらの壺は、周溝の四隅にから見つかっています。方墳の各コーナーに意図的に供えられていたものと思われます。

船尾町田遺跡

千葉ニュータウン内で調査された古墳は少ないですが、船尾町田遺跡から3基の古墳が見つかっています。その中の全長30mの規模の前方後円墳から、金銅装の飾り金具が装着された小刀1点と金銅製の鈴2点が出土しました。古墳の築造年代は、古墳時代後期、6世紀末頃と思われます。



前方後円墳（2号墳）

金鈴

金銅装の小刀

V -1 印幡郡舩穂郷の中心　奈良・平安時代

古墳時代前期の集落が終息するとともにこの地域は閑散とした景観に変貌していきますが、奈良時代以降新たな開発が進められ、大規模な集落が展開するようになります。特に、印旛沼に注ぐ戸神川下流域には、拠点的な集落が集中して営まれています。集落の最盛期は９世紀前半頃で、10世紀前半頃まで規模を縮小しながら継続しています。

西根遺跡から出土した墨書土器から、この地域の開発を主体的に担ったのが、埴生郡司「大生部（大壬生部）（おおみぶべ）直」であることが推測され、他に「丈部（はせつかべ）氏」や「物部（もののべ）氏」の関与も鳴神山遺跡や角田台遺跡の墨書土器からうかがうことができます。

船尾白幡遺跡

奈良・平安時代の竪穴住居63軒、掘立柱建物36棟が調査されました。掘立柱建物には、比較的大型の建物も含まれています。未調査部分が広く残っていることから、大規模な集落になると想定されます。鳴神山遺跡とともに舩穂郷の中心を担った遺跡と考えられます。

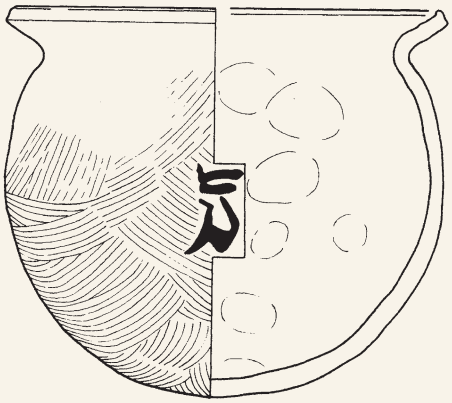
掘立柱建物跡群
左側の建物には片側に廂がついています。

土器の出土状況（SI113）
カマド右脇の床面上から13点の土器がまとまって発見されました。すべて伏せた状態で、一部は２枚・３枚重ねになっているものもあります。そのまとまりは長方形状となっており、盆のようなものの上に置かれていたものと思われます。

鳴神山遺跡

奈良・平安時代の竪穴住居281軒、掘立柱建物43棟で構成された印旛沼北岸最大の集落です。中心的な集落でありながらも、掘立柱建物は小規模なものが多いのが特徴です。ただ、出土遺物の中には、当時の高級な焼き物である三彩陶器や緑釉（りょくゆう）・灰釉（かいゆう）陶器の他、畿内（きない）産の甕など貴重な文物があり、集落内に有力者が存在していたことが推測されます。

灰釉陶器の出土状況（Ⅱ043）
竪穴住居のコーナー近くから発見されました。水滴と呼ばれる容器で、墨汁などの液体を入れたものと思われます。



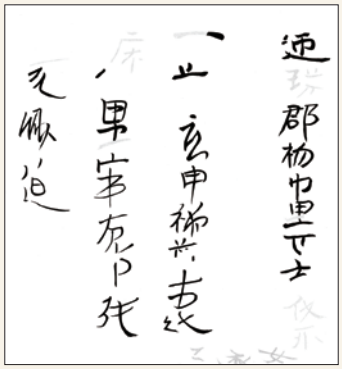
畿内産の甕（220竪穴住居）
底部が丸底になり、外面にハケ目の調整、内面に当て具の痕跡となるくぼみがみられるのが特徴です。

角田台遺跡

奈良・平安時代の竪穴住居41軒と掘立柱建物5棟が調査されました。鳴神山遺跡に比べて遺構の密集度は高くありませんが、151点もの墨書土器を主体とした文字資料が出土しています。

甕に書かれた「匝瑳郡物部・・・・・」と読むことができる長文墨書土器が古代印幡郡に属する遺跡から出土していることから、地域の開発に対する匝瑳郡の関与が推測されます。また、「久須」は「久須原部」を指す可能性もあり、相馬(倉麻)郡との関係もうかがうことができます。

長文墨書土器



匝瑳郡物部黒万呂代奉女神□

V-2 水辺のマツリ　奈良・平安時代

西根遺跡

奈良時代後半から平安時代にかけての1条の流路から、多量の土器や木製品が出土し、祭祀(マツリ)に関連した遺物も発見されました。

マツリの道具としてあげられるのが人形及び馬形の木製品です。重なって出土し、同様な細工を施していることから、同じ時期に製作されたものと思われます。人形(ひとがた)とは、人間の形代(かたしろ)として、呪いや病気治療・祓いに用いられたとされています。人間の身代わりとなって罪や穢を流す祓いの行為に使用されたのでしょう。馬形も同じように祓いの祭祀に使われたようです。

44点出土した墨書土器の中にも祭祀を示すものが含まれています。3点出土した長文墨書からは、壬生部や丈部の姓をもつ人が延命や祓いなどの神への祈りを捧げた内容が記されており、人形や馬形の木製品とともに祭祀道具の一つとして位置づけられていたようです。

流路5状況

人形・馬形の出土状況

櫛の出土状況

長文墨書土器

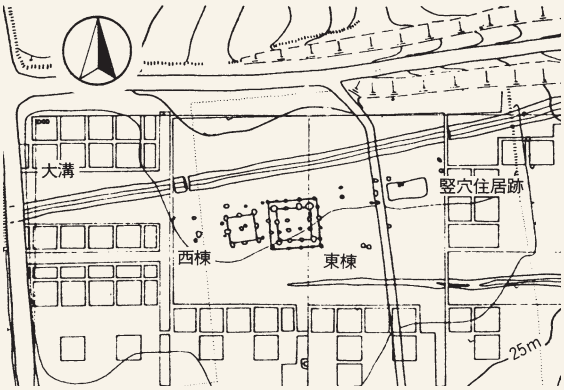
舟穂郷生部直弟刀自女奉

(土器の内面)

大塚前遺跡　甍棟の仏堂

掘立柱建物２棟と東西に長い竪穴住居１軒、溝３条が見つかっています。掘立柱建物の１棟（東棟）は、３間×３間の総柱で、床板をはった仏堂的な建物と考えられています。熨斗瓦が多く出土しており、出土した瓦の数量比と屋根の形状を復元して検討した結果、大棟に甍を飾った甍棟建物に復元されています。

出土した瓦は、寺院遺跡としてはきわめて少ないですが、軒丸瓦や軒平瓦には、下総国分寺と同笵になるものもあり、同国分寺との関係がうかがわれます。また、「埴」と刻まれた文字瓦が42点出土しています。



全体図

掘立柱建物と大溝

軒丸瓦

軒平瓦

文字瓦
平瓦に「埴」と刻まれています。印幡郡に隣接する埴生郡を指しているのかもしれません。

VI 印西牧の展開　江戸時代

中・近世の牧は、現代の牧場とは違い、台地上の原野に野生馬（野馬）を放し飼いにして、牧の境を土手や堀（野馬土手・野馬堀）で囲み、「捕込」と呼ばれる土手囲みの区画に追い込める野馬捕りによって、幕府や藩の軍用馬などが確保されていました。印西牧は、房総北西部の小金牧（５牧）の一つで、当初は「印西野」と呼ばれ、現在の白井市から旧印旛村にかけての東西20kmほどの広い範囲でしたが、江戸時代前期から中期の新田・新畑開発によって、耕地・集落との境には野馬除土手も造られ、現在の白井市平塚から印西市泉あたりの４km四方程度に縮小されました。将軍家の鷹狩や鹿狩も牧で行われましたが、明治時代には開墾の対象地となり消滅しました。千葉ニュータウン地区内では、大森割野遺跡（割野所在野馬土手）・泉北側第３遺跡・荒野前遺跡などで、野馬土手や堀が発掘調査されています。

印西牧絵図（明治２年　香取雅昭氏蔵　印西市教育委員会提供）

野馬土手（野馬除土手）の状況（大森割野遺跡）

現在の千葉ニュータウン中央駅周辺（都市再生機構千葉ニュータウン事業本部提供）

遺跡見学会のようす（船尾白幡遺跡）

体験発掘（船尾白幡遺跡）

土器に触れる（船尾白幡遺跡）

●発　行　日：平成26年7月18日
●編集・発行：公益財団法人千葉県教育振興財団　〒284-0003　四街道市鹿渡809-2
●印　　刷：株式会社エリート情報社